

2002年度渥美奨学生のページ 「エッセイ」

- アブリズ イミテ 「私に一番影響を与えた人」 ----14
- 白 寅秀 「日本人が教えてくれた大切なもの」 ----15
- 陳 姿菁 「日本に来て感じたこと」 ----16
- 曹 奎煥 「虎は死んでその皮を残す、人は死んでその名を残す」 ----17
- 胡 炳群 「私を支えてくれた人たち」 ----18
- イコ プラムディオノ 「母」 ----20
- マンダフ アリウンサイハン 「バルトリドが教えてくれたこと」 ----21
- ランジャナ ムコパディヤーヤ 「無意識に受けた影響」 ----22
- 朴 栄濬 「教え子から学ぶ」 ----23
- 孫 建軍 「娘は0歳、私は1歳」 ----24
- 王 溪 「人生の恩師」 ----24
- 于 曉飛 「落花生」 ----25

私に一番影響を与えた人

アブリズ イミテ
Abliz Yimit

横浜国立大学・博士 (人工環境システム)
横浜国立大学環境情報研究院客員研究員(在横浜)

人間は誰でも、周りの様々な人から影響を受けながら成長し、その影響により生き方や考え方あるいはその後の人生まで大きく変わってしまうことがあると思います。「今までにあなたに一番影響を与えた人は誰ですか」というテーマを目にした瞬間、無数の人々の顔が浮かんできました。その原因は、私がタクラマカン砂漠の周辺農村で生まれ、中央アジアを代表するウイグル文化の中で育てられ、新疆大学の教師を経て、日本で博士号を修得して留学生生活を終わらせるまでの長い人生の旅の中で、たくさんの先生や周りの方々にお世話になってきたからです。

私は、今までに出会った沢山の先生方の影響を受け、今の自分があると思っています。これは私の父は学校教育を受けなかったにも拘わらず、私に就学前から、学校の先生を尊敬すること、そして何でも先生の指示に従うことを教えてきたからです。

私は今までに出会った先生方の中で、特にゼイナブ・アビテ先生のお名前を忘れることは出来ません。ゼイナブ先生は私の小学校時代のクラスの担任であり、ウイグル語と算数の先生でもありました。ゼイナブ先生は、当時子供の目から見ても魅力的な20代後半の女性でした。私の人間形成にとって幹となる大切な芽が養われたのは、実にこの貴重な小学校時代であり、ゼイナブ先生の影響が非常に大きかったと思っています。その語り口はとても優しく、学生にも親しみやすい性格でした。子供と接する時のキラキラと輝いた楽しそうな先生の顔は今でも覚えています。先生は明るい性格で、勉強する学生には非常にやさしく、勉強しない学生には特に厳しい方でした。小学校に入学した時期のことですが、私が

ウイグル語の32文字を全て覚え、誰よりも早く読み書きができるようになった時や、算数の正解を出した時、私は先生に大変誉められ、それがとても嬉しくて、毎日の学校生活が「楽しい!」、学校が「好きだ!」と思うようになりました。知りたい・学びたい・体得したいという欲求が強まり、更に張り切って勉強するようになりました。

先生は、子供が何かに興味や関心を持つに当り、一番影響を与える存在であると思います。当時教科書の内容はあまり面白くありませんでしたが、ゼイナブ先生は教科書の内容を説明するだけでなく、毎日時間をつくって、何とも言えない語り口調で、教科書以外の物語や昔話の本を読んでくれました。また物語のすばらしさ、自分の気持ちや思いを文章にする楽しさなどを先生に繰り返し教えてもらい、本を読むのが好きになりました。そうして中学から高校にかけても一所懸命勉強するようになった私は、順調に大学に進学することができました。高校卒業後、私は先生のお宅を訪問し大学に合格したことを報告しました。その時、先生は誰よりも喜んでくださり、「これは君にとって新しいスタート点で、これからはもっと自信と勇気を持って頑張りなさい」と励ましてくれました。今でも私は、毎年故郷に帰った時には必ず先生のお宅を訪問し、先生から色々なアドバイスを受けています。

私が大学卒業後“教師”という職業に就こうと思った背景にも、ゼイナブ先生の影響は非常に大きなものがあつたと思っています。もちろん、まだ小学生になったばかりの頃だったので、その当時の私には自分の将来についての具体的な考えなどあるはずがありません。しかし先生から感じた「教える」ということに対する情熱は、私の幼心に実感として伝わっていたと思っています。

新疆大学に教師として採用されてからは、例えばほんの些細な場面においても、常に学生により良い影響を与えるような先生でありたいと願い、絶えず学問に励みました。30代半ばになった私は単身留学をし、博士号を取るべく、この数年間は全力で頑張ってきました。このような生活態度、物事に対す

る興味・関心、そして人生全体に対する価値観などの根底は、正に小学校時代のゼイナブ先生から受けた教育により身につけ、その後今日までずっと変わらず続いているものと思っています。

日本人が教えてくれた大切なもの

ベック
白 眞秀

早稲田大学 博士 (商学)
大韓民国産業資源部所属産業研究院副研究委員
高麗大学非常勤講師(在ソウル)

今年の4月で、日本での生活が丁度8年目になります。いや、大学を卒業してはじめて来日した2年半に及ぶ日本での生活を合わせると10年以上になります。韓国のことわざで「10年経つと、江山も変わる」という言葉があります。10年という時間の長さを象徴的に言い現しています。10年で自然が変わるなら、人間はなおさらのことです。この日本滞在の10年間、私は結婚をし、子供を設けています。学生としての私の身分は変わらなかったものの、一人の女性の旦那であり、二人の息子の父親となる経験をしました。家族との関係だけではありません。日本で知り合った多くの人々は、私が大きく変身するのに大切なきっかけを提供してくれました。その幾つかをご紹介します。

ハンゲル愛好会。友人の紹介で北区主催のハンゲル講座の講師として招かれたのは6年前のことです。週1回の講座が10回で終了した後、ハンゲル愛好会というサークルとしてその後も続けられました。毎週水曜日の夜7時になると、仕事帰りのOLや会社員が疲れた体を運んで一ヶ所に集まり、韓国語を学び、韓国のことを熱く語りました。言葉を勉強するというよりは、映画や歌手について語り合い、韓国の料理などを楽しんでいたという表現がより正確

だと思います。1年前には念願の韓国への団体旅行が実現され、寝食をともにしながらそれまで身に付けていた韓国語力を現場で発揮することができました。

私はこの会のメンバーと長い間、お付き合いしながら日本という国の一面を肌で感じる事が出来ました。それは個性ということです。彼・彼女らは年齢や職業とはまったく関係なく、自分が好きな世界を楽しんでいました。その世界のためには、自分の大事な時間やお金を惜しまず使い、他人との交流の輪を広げていました。何か実用的な目的があって、それを達成するためにハンゲルを勉強するという事ではありませんでした。私が見る限りでは韓国人と付き合い、韓国のことを楽しみたいという漠然とした目標としか何えず、その底力は並々ならぬことでした。私は個性豊かな彼・彼女らから日本の国民がもつ粹を垣間見ることができました。

3階のおばあさん。高層マンションが並ぶ光が丘団地に引越したのは2年半前のことです。その前は住宅街にある3階建てのマンションに住んでいたが、隣人との交流がほとんどなかったので、団地への引越は疎外感をなお深めるだろうと思いました。韓国でも最近マンション住まいが増えるようになり、隣に誰が住んでいるのかわからない暮らしに変わりつつあり、私にも多少の免疫はありましたが、日本という他国で親戚もいない我々の家族にとって、隣人との交流のなさはつらいことです。

ところが我々に対して実の母親以上に良くしてくれた人に出会うこととなります。家内が入会していた生協で知り合った3階のおばあさんは、我々に家族以上の愛情を注いでくれました。おめでたいことがあれば赤飯を炊いて直接もってきてくださり、ドイツニーランドに行った時にはいつも孫達へのお土産を欠かすことがありませんでした。おばあさんは我々の家族との付き合いから得られる見返りなどは何もなかったにもかかわらず、献身的に尽くしてくれました。私は10年前、初めて日本へ来る前に、「男はつらいよ」という映画をみて、東京下町の人情味あふれる庶民の生活を日本のイメージとして頭

の中に描いたことがあります。私が住んだ場所は下町ではありませんでしたが、日本に対してもっていたイメージを直接復元することが出来たのは、3階のおばあさんのお陰だと思います。最近腰を痛めて外出が自由に出来ないおばあさんの健康がとても気になります。

中村塾。毎年新年を迎えると家族で訪れる家があります。そこではわが家族以外にも多くの人々が集まり、夜遅くまで議論が繰り広げられます。留学生が半分、地元の日本人が半分で、大学院生、高校生、主婦、税理士、農業の方、会社のOL、ベンチャー企業の社長など、さまざまな人々がお互いの垣根を越えて自由でしかもエネルギッシュな会話を交わします。この場を提供してくれる張本人が中村さんで、彼は高卒でいち早くあるスーパー企業の社長に上り詰め、50代になってから大学や大学院に入学した珍しい日本人です。

年功序列や終身雇用の制度が日本の高度経済成長を支えた主要な要因であったことは一般的にいえるでしょう。しかし日本のダイナミズムは競争もなく多様性のないドライな人間たちによって作られたものではありません。中村さんのように、固定観念にとらわれない自由な発想をもち、学歴や地縁にこだわらない平等な考え方をもち人々が今日の日本の立役者でもあります。来年の新年会には参加できないと思うと、奥さんの手料理が恋しくなりますが、遠く韓国の地で参加者の全員に激励のエールを送ります。

私は、30代の多くの時間を日本の地で過ごしました。その間、私が学校へ通う早稲田の商店街には以前にはなかった携帯電話やファーストフードの店が増え、ここ10年で、成功するビジネス・モデルも様変わりしたことを実感します。変わったのは商店街だけではありません。マス教育の影響を受け育った私には個性の豊かさがよみがえり、灰色の都心で生まれ育った私には人間の暖かい血が戻り、効率の追求が人生の目的であった私には多様性というもう一つの価値が加えられました。この場を借りて私

に大切なことを教えてくれた日本のお三方に心から深く御礼を申し上げます。

日本に来て感じたこと

ちん しせい
陳 姿菁

お茶の水女子大学 博士 (国際日本学)
(在東京)

「私が両手を広げても、お空はちっとも飛べないが、飛べる小鳥は私のように、地面をはやくは走れない。私からだをゆすっても、きれいな音は出ないけど、あの鳴るすずは私のように、たくさん唄は知らないよ。すずと 小鳥と それからわたしみんながちがって みんながいい」という金子すずの詩がふっと頭の中をよぎった。

日本にきて、何を感じたかとよく聞かれるが、まともなことを答えるのは難しい。それは、日本で得たものがあまりにも多いからである。敢えてそれらをまとめるのであれば、来日する前に比べてより広い視野を持つことになったということであろう。

台湾にいた頃、いくら勉強して、いくら情報を吸収しても一方通行でしかなかった。というのは、台湾にいる立場からでしか物事を見る尺度を持っていなかったからである。台湾とは違った立場から物事を見ようとしても、想像の域でしかなかった。しかし、日本に来ることによって、日本の立場から、すなわち外から台湾をみることができた。つまり、箕浦1997が述べたように、人は、「異文化との接触で(中略)初めは空気のように思っていた自文化に、厚い文化的意味が込められていること、自分がどのような意味の世界に住んでいたかに気づく」ということである。また、母国文化のみならず、異文化である日本についても外と内の二つの方向から見ることができたことは、大変貴重な体験であった。例えば、来日する前には日本文化に対して、男尊女卑と

か亭主閑白とか所謂一般的な固定観念を持っていたが、実際に日本文化に入ってみると、そうでもないということが分かった。場合にもよるが、事実上は女性の方が実権を持っていることも少なくない。また、男性が働き、女性は家庭の面倒を見るという分業に対して、共働きが普通である台湾人にしてみれば、効率の悪さや不公平を感じたことも少なくなかった。しかし、日本社会に入って、日本人の考え方を聞いてみると、分業にもそれなりの理由があることに気づいた。確かに、女性の社会進出にとってはマイナス要因となっていることは否めないが、会社の立場からすると、妊娠・出産を抱えている女性より男性の方が会社により大きい利益をもたらすと考えても無理はない。

ことばの面においても、来日まもない頃、言いたいことがうまく表現できないこともあり、母語の方が表現力があると思っていたが、日本語に慣れてくるにつれ、日本語の美しさを母語では表せないこともあるということに気づいた。また、会話の場面においては、話を言い切らずに途中で打ち切り、相手に自分の気持ちを察して欲しいという日本語の会話スタイルに戸惑いを感じたこともあった。しかし日本語の会話スタイルに慣れてくると、日本語の方が使いやすく便利だと思うことも多々あって、場合によっては、返って言いきることの方が望ましいとされる母語の会話スタイルに驚かされることもある。

このように、物事の表と裏という両面性を、異文化という環境の中で少しずつ感じるようになり、物事に対して単純に判断を下すのではなく、より異なる視点から物事を捉えることの重要性を認識するようになった。

一言でいうのは簡単だが、身をもってこのことが分かるまでに長い年月がかかった。留学という経験が無ければ、「わたしと小鳥とすずと」の詩の真髓が分かるまでに、おそらくもっと長い時間がかかったであろう。金子すゞの詩を読んだときに、何て素敵な詩だろうと感動したのは、単一の尺度ではなく、大きな視点で物事を捉えることのすばらしさに共鳴したからではないだろうか。これは日本での留学経験から得た宝物である。

虎は死んでその皮を残す、人は死んでその名を残す

チョウ キョウファン
曹 奎煥

早稲田大学 博士 (環境資源理工学)
早稲田大学理工学研究科地球科学所属助手

私は、自分の存在価値を認識して生きがいのある人生にしたい。そして人(類)とその社会に直接的・間接的に貢献できる人生を送りたい。生存のために生きるのではなく、現在与えられた環境がいくら厳しく難しくても、その中で人を思いやることができ、人生の価値を見つけることができる、そのような人生観の持ち主になりたい。そう思い始めたのは高校生になってからである。このように考えるようになった背景には、いままでいろいろな経験をし、本を読んで学び、学校で学びながら、優れた先生方にいろいろと影響を受けたことがとても大事であったことは否定できない。

しかし、その中でも私の人生観の確立に最も大きな影響を与えたのは、私を全面的に信じ励まし、無条件の愛を示してくれた父である。父の人生は、物質的に厳しい状況であったが、その中でいつも生きがいと幸せを追求したものであった。私の家は豊かではなかったが、いつも暖かさを感じることができた。そこにはどんな物にも変えられない平穏さと暖かさがあった。そんな父の人格と徳望は、私の故郷では広く知られた事実である。父は私に対して単純に父親としての役割だけではなく、知性人として生きること、社会における自分の役割、人生そのものを教えてくれた。父の教えはこれから社会で活躍していく私に必要不可欠なことであった。私はこのような環境下で成長してきて、その中で父の教えとともに人生観を確立することができ、自分の存在価値を認識するようになった。

私は父を人生の師匠だと考えており、今まで人々に自慢してきた。深い知識はないものの徳望があっ

て、強・柔を兼備した人であった。時には鋭い行動をみせて近づきがたくみえても、優しくて寛容であった。それは私だけではなく家族みんな、そして人々にも変わらぬ優しさを感じさせることであった。また、私が見聞を広める機会を積極的に支援してくれたことも父の私に対する教えの一環であったと思われる。私が幼い時から今まで罪を犯さずに誠実に生きることができたのも、研究者を目指すようになったのも、すべて父の影響だと告白するのが正直な答えだろう。

父は7年前に亡くなったが、生前、兄弟が集まる場があればいつも「虎は死んでその皮を残す、人は死んでその名を残す」と私達に言ってくれた。正にそのとおりであると実感している。今も私は教訓として肝に銘じている。このことは、いまだに私が父の影響から逃れていない証拠だろう。私が研究分野において名を残すことが、今は大地に眠る父に対する恩返しであり、学問の発展に寄与し、人類に貢献（地球について理解を深め、地球を愛する）することだと信じている。今後も父の教訓と教えを一生忘れることなく感謝するとともに、更に研鑽を積むことを誓う。そしてこのことが自分の存在価値の認識につながるだろう。

私を支えてくれた人たち

こ へいくん
胡 炳群

日本工業大学 博士（システム工学）
株式会社和井田製作所（在岐阜高山）

「今までにあなたに一番影響を与えた人は誰ですか」というテーマを見た瞬間、子供時代から博士課程修了の今日まで、私が影響を受けたくさんの人々を思い出した。私の故郷は、中国の南の少数民族（トン族）が集まる山岳地帯にある。海拔が高く、交通がとて不便で、教育環境も整っておらず、経済的に

恵まれていないことから、勉強したくてもできない人がたくさんいるのに、私がこうして幸運にも進学することができたのは、たくさんの方々に支援していただき、影響を受けた結果である。日本人の得意な“モノ作り”と“モノ創り”の技術を勉強するために渡日し、7年間の歳月が流れ去った。精神的圧力と緊張感が伴うこの7年間、文字通り毎日、更に大学院生の5年間は、先に見える明かりに向かって暗いトンネルの中を進むように、合理的に動いていくのが精一杯で、実際にこのようなロマンチックなことを考える暇がなかった。今になって、やっと目標に辿り着き神経のバネが多少緩まり、はじめて凍結されていた感情の心弦が知らないうちに動きだしたようで、なつかしい日々と私を支えてくれた人々の昔日の面影を、まるで昨日のこのように思い出し、このテーマについて興味が生まれた。自分の半生を振り返れば、私に影響を与えた人は多いが、その時の目標、その土地の経済環境、国家制度の違い、文化および生活習慣の違いを経験したこの過程には、特に私の人生の分水嶺、交差点での選択に大きな影響を与えてくれた人々が多く、もしこの方々に会わなかったらということ想像することさえできない。私の半生に不可欠な人々がずっと心に残っている。

母は末子の私に対して、そんなに高学歴に育てることは望まず、農村の各種生活技能を持ち、農業をして家族と一緒に幸福な桃源生活を過ごせば良いと考えていた。そして、母の腹中の私は伯母（母の兄嫁）の腹中の娘（私の従妹）と許婚した。故郷にはそんなことが普通であり、そんな家族が本当に幸せとされ、離婚率がゼロである。その婚約は高校卒業まで維持された。母の期待に答えるため、子供の頃からモノ作りの趣味を持っていた私は遊び道具をよく作った。例えば、現在の高校生、大学生が使うスケートボードやリングスケートは、私が小学生のとき竹と木を利用して手作りしたものと全く同じだ。幻灯の装置や（ガラス）フィルム画面も、自分が想像したことを母と相談して作った。中学校から夏休みと冬休みを利用して、家具や農具の製作、土木建築、狩猟、伐木などの仕事を母から習った。博士課程の研究実験

がほとんど問題なく順序だててすることができたのも、母の教育から切り離すことはできないと思う。公務員の父は遠い農場に行っていた。たまに帰ってもお客さんみたいだったので、私に何か影響を与えてくれたかはっきりとは言えない。敢えて言えば大学の進学と日本留学を認めて貰ったことぐらいだろうか。今考えると、母が設定した人生の方が幸せだったかもしれない。彼女が期待した故郷の匠人が誕生していたかもしれない。自分で選んだ工匠の道は細く長く辛い道である。

兄は中国文化大革命前の最後の中学校卒業生である。それから、民辦教師(非公務員)として、先生が一人だけ、狭い教室がひとつだけの学校に長く勤めた。同じ教室で小学校の各学年に各科目を教えることは想像しただけでも難しい。兄は毎45分間の授業を不均一の数分間に分け、説明、練習、質問、自習など同時に授業を行った。そんな状況でも、統一テストの成績はまずまずで進学率も高く、よく表彰された。全国統一入試の高等教育制度が回復した後、兄は公務員の教師をめざして、高校課程を自習して、現役の高校卒業生と平等に競争して師範学校へ進学した。私が高校生の頃、兄によくいじめられた。「抱負がない」「山外の世界がぜんぜん分からない」「弱虫」などとよく言われた。兄に負けられないように頑張ったが、第二希望の大学へ進学したので、結局は負けだった。修士入学試験に再度チャレンジした結果は第一希望が実現し、非常に良い成績を取った。特に数学が満点だった。その時初めて、兄に「今回はお前が勝ちだ」と言われた。

睢景臨氏は、私が大学卒業後勤めた西南工具総廠の社長である。社長は中国文化大革命前の大学卒業生で、科学院のプロジェクトを実施した経験も持ち、国営「三線企業」の先駆となり、指導および開発した製品がアメリカやヨーロッパの市場のシェアを獲得した優秀な企業家である。社長と初めて会ったのは入社日だったが、いつも繁忙の社長が会社の紹介と私に期待することを優しく、細かく説明して下さった。その時、人生をこの会社に任せようと決意し、

真摯な情熱をもって働き、それは日本に来るまで続いた。社長の特別な計らいにより、いろいろなチャンスを与えられ、大事な仕事をどんどん任せられ、さまざまな経験をさせていただき、また、その努力が「三線優秀青年建設者称号」として認められた。一年間の日本研修のチャンスも社長からいただいた。それまで海外へ行くことなど想像もしていなかった。社長と関係は上下ではなく、休日に社長の家で過ごすことが多く、奥さんの美味しい餃子をよくご馳走してもらった。再度日本に私費留学生として来るため、社長にお願いしたとき、「会社の立場から言うと、君を育てたのは大変なことだった。それが逃げて行ってしまう。しかしながら友だちとして応援する」と言ってくださった。当時、国営大手企業は社会負担、資金不足、三角債務、民営中小企業との競争、市場の縮小、国際経済環境不況などの問題に対してなかなかうまく対応できていなかった。今から考えると、留学の選択は自分の人生にとって正しかったと思うが、社長の友情に対して決して返すことのできない債務がずっと心に残ることになった。

鈴木清先生は私の修士課程と博士課程の指導教授である。留学生別科の日本語の先生が「徳が高く、広い知識を持ち、たくさん研究成果があり、みんなから尊敬されている素晴らしい有名な教授」と紹介してくださった直後、期待して進路を決めた。早速、「あの研究室は大変厳しい。この大学だけではなく、日本全国でも有名だよ」という先輩からの噂も耳に入った。厳しい研究をして、研究を進めようと考え、この研究室へ行く決心が更に強まった。1997年10月30日に個人面接があり、鈴木先生と初めてお会いした。入学試験の前だったが、翌日から研究室に入った。翌年の4月より、鈴木先生の正式な学生になり、研究室の規定を守るだけではなく、毎日「ほうれんそう」(報告・連絡・相談)をすることになった。一生懸命書いた報告書を初めて提出した時、「何語で書いた報告書か分からない」と言われて、そのまま返された。一時間くらい書き直した報告書を再度提出した時も同じように返された。繰り返して三回目にやっと収めてくださった。夜、添削済みの

報告書を先生からいただいたが、「持ち帰って開いて見たとき、私はびっくりした。そして同時に、ある種の不安と感激とに襲われた。初めから終わりまで、全部朱筆で添削し・・・文法の誤りも訂正してあるのだ」という「藤野先生」が初めにチェックした鲁迅のノートと違わなかった。報告書中の実験内容のチェックが更に細かく、正直に言うとは大変厳しかった。半年後、訂正はだんだん少なくなり、代わりに「×」の符号と「なぜか？」という語が増えた。私は先生の「なぜか？」から大変勉強した。問題の原因を調査するときに関連知識を覚え、対策の方法を探求すると同時に思考方法も変わった。学問だけではなく、生活習慣、各種礼儀、人との付き合い方など、微細な社会知識も教わった。また、経済的にも支援していただき、たくさんの学会や研究会に参加し、研究所や会社を見学させていただいた。先生から教わったことは①研究はアイデア、②他人のやらないことを、③発想の転換を(欠陥を逆手に取って)、④生産に役立つ研究を、⑤お金が無くても研究はできる、⑥不得意なことは友人に、⑦思いついたら即実行(百考は壱行に如かず)など、先生が研究を遂行される時のモットーである。私の博士論文を構成している5つテーマの研究を通して、この7つの研究のポイントの深い意味を大体理解できたと思うが、これから、自分の新天地を開拓していく時、さらに活用したい。鈴木先生を、自分の師と仰ぐことが通常的感情であるが、では先生はどういう人物かということについては、私の立場ではとても評価できない。塑性加工、金属繊維、複合材料、複合作業機械、超音波、ブラシ加工、切削、研削、研磨、加工液など、先生の多岐多方面の技術研究開発の成果が実用化している。先生の著書「加工技術開発の舞台裏ーコロンブスの卵を探してー」と「研究は美味しい」という2冊の本をお勧めしたい。

人と人は支え合うことができるが、一人では何も出来ないと思う。今後も、私を支えてくださった方々に対して感謝の気持ちを続け、さらに社会人として、自分の為・社会の為に働きたいと思う。

母

イコ プラムディオノ
Iko Pramudiono

東京大学大学院（電子情報工学）

人間は生まれたときから多くの人に助けられなければ生きていけないものです。私も多くの人から影響を受けながら今の私がいるわけです。私にとって母以上に影響を与えた人はいないと思います。

私は生まれたとき、右手が麻痺して動かすことができませんでした。胎内で右手が両足に挟まり、正常に成長しなかったためでした。それを治療するために、きめ細かな理学療法が3年間施されました。母が手を毎日お湯に浸しながらマッサージしたりしてくれました。

奇跡のように、右手が少しずつ動かせるようになった時の喜びようは想像しがたいものです。私はインドネシアの数百あると言われる民族の中で、ジャワと呼ばれる民族の出身です。貴族以外のジャワ人の氏名には基本的に家系を表す苗字がありませんが、氏名をなす単語一つ一つに意味を込める風習があります。私の生まれた時の名前はエコ プリハンドヨでした。エコは長男に付けるごく一般的な名前でしたが、重い病気から治ったときのジャワ伝統にならって、母は、喜びを表すために、私の名前をイコというインドネシアでも極めて珍しい名前に変えました。また、試練に対する堪忍という意味を含むプリハンドヨも、「卒業前」という意味を含むプラムディオノに変えました。私が生まれた時、父がまだ学生だったためです。

右手は動かせるようになりましたが、私は子供の時から身体が弱くいつも病気になっていました。特にひどかったのは中学校の時に1ヶ月以上学校を休んでしまい、リハビリのために十分なスポーツをやらなければならなかったことがあります。近くのバドミントンクラブに通うようになりましたが、もっと毎日練習できるように家の庭を改造してバドミン

トンコートを作ってくれました。

「何より健康」は母の口癖の一つです。特に栄養にはとても気を配りました。貧しいながら、少しでもバランスの良い食事をいろいろ工夫していました。私も現在、子供を持つようになり、健康に対するその母の姿勢を模範にしていきたいと思っています。

もう一つの母の口癖は「親の一番の遺産は教育」です。そのため、学校のためならどんなにお金がかかっても厭わないと言い続けてきました。また、母と父の家族はそれぞれ10人の兄弟姉妹がある大家族のせいか、わが家に多くの親戚が住み込み、母はその子供たちを自分の子供のようにかわいがっていました。お金がないため学校に行けなくなった子供ばかりです。私たちの家は決して裕福な家庭ではありませんが、より貧しい親戚の子供を卒業まで学校に通わせてきました。その家計を支えるために若いときから料理が好きな母はお菓子を作ったり、料理の注文を受けたりしました。母の広い交流を生かして洋服や漢方薬の個人販売もしていました。家に住み込んだ親戚の子供たちも母から料理やお菓子の作り方を学んだりしていました。今は何人かの母の“弟子”が独立して自分の事業を持つようになりました。弱い立場の人間に対する母の姿勢は、きっと私の外国人研修生支援活動の原点なのでしょう。

今、母は定年となった父と二人で暮しています。イスラムの教えでは、誰よりも母を大切にしなければならぬのです。ムハンマド預言者が、かつて「人間は誰に最も従順しなければならないのか」という質問に対して、「母、母、母」と三回繰り返してから「父」と答えました。私もできるだけ早く国に帰り、母のそばにいてあげたいと思っています。

バルトリドが教えてくれたこと

マンダフ アリウンサイハン
Mandah, Ariunsaihan

一橋大学大学院 (地域社会学)

ワシーリィ・ウラディミロヴィチ・バルトリドは、ロシアが生んだ偉大な歴史家で、ペルシア語、アラビア語、トルコ語の原典の根本史料から、アジア史を研究した。

1869年に生まれ、1930年に逝去した彼の人生は、アジア史の研究という一つの目的のために設計されたものであった。彼は、1901年からペテルブルグ大学で研究・教育活動を開始し、その後、同大学で30年間の忙しい学者生活を送った。この間に厳密で純粋な原典研究によって、世界史像の形成に大きな影響を与えた。400遍を超える膨大な著作を公にし、それまであまり関係がないと思われていた内陸アジアの歴史と、西アジア、インド、中東などの「文明圏」の歴史が密接に結びついていることを明らかにし、「ユーラシアの内陸世界が、人類史のうえで鍵となる重要な地域である」ことを見事に描いている。

バルトリドのアジア史の研究においては、モンゴル時代の歴史、チンギス・カンに関する研究は重要な位置を占めていた。当時、ヨーロッパの西洋を中心とする文明世界の価値観からみると、遊牧民は辺境の未開人で、人類の歴史に何も役に立たない存在であった。バルトリドは、こうしたユーラシア世界や遊牧民が歴史上で果たした役割に対するヨーロッパの偏見や固定観念に囚われず、アジア内陸の多くの民族がそれぞれに優れた文化を持ち、世界の文明に大きな影響を与えたことを、確かな史料から実例をあげて立証し、当時のヨーロッパの知識人たちの視野の狭さを浮き彫りにした。

彼は1896年にロシアの歴史家として初めて、チンギス・カンが、ロシアを征服した単なる害獣のように憎むべき野蛮人でなく、世界史というものを

成り立たせた、歴史的人物であることを強調したことで、それまでのロシアのモンゴル研究に衝撃を与えた。

ロシアの社会主義革命後、ソ連では、学問に政治性が強調され、社会の歴史及び歴史的人物の活動を政党の立場からのみ政治的に取り上げる歴史研究の方法論が存在した。この結果、ソ連では、歴史家やモンゴル通による「反動の象徴としてのチンギス・カン」批判が盛んになり、チンギス・カンは、歴史上全く否定されるべき反動的人物で、彼を讚美し理想化し、ロシア史における反動的役割をいつわろうとするものは人民の敵と決めつけられた。アジア史、モンゴル時代の歴史は、そうしたソ連政府の正式の見解に基づいて行われることを余儀なくされる。これに対し、彼は、時勢の移ろいに関わらず、自分の学問的姿勢を変えようとはしなかった。

バルトリドは、『ヨーロッパとロシアにおける東洋研究の歴史』(レニングラード、1925年)の中で、モンゴル時代は世界に平和をもたらし、東西の相互文化・経済交流に貢献した、と論じてやめなかった。このため、彼はモンゴル人の民族主義的傾向を助長しようとねらう、反ソ的な歴史家として痛烈に批判され、その著作の出版が度々中止となった。

私が、バルトリドというこの偉大な歴史家について知ったのは大学に入ってからである。大学1年生の時、モンゴル帝国の他民族に対して行った侵略的行為を批判的立場から論じるレポートを作成するために、大学の図書館で集めた何冊もの歴史文献中に、『モンゴル侵入時代のトルキスタン』(ペテルブルグ、1898-1900年)、『ヨーロッパとロシアにおける東洋研究の歴史』(レニングラード、1925年)という、彼の2冊が含まれていたのがそのきっかけである。

たしかに最初は情報収集のため読んでいたが、読んでいるうちに単なる情報というより、ペテルブルグ大学に集積された豊富な史料に基づく、あくまでも実証的な研究と、どんな時代においても自分の信念を貫く、学者としての純粋な学問的態度に大きな感動を覚えた。

この2冊の本は、学問の自由がある程度認められていたロシア革命以前と、その自由が厳しく制限されたソ連時代というそれぞれ異なる時代に書かれたものであったが、どちらの本にも一貫してモンゴル時代の歴史があるがまま均等に扱われ、原典研究によって得られた内陸アジア・中央アジアの世界の歴史に対する彼の信念が見事に貫かれていた。

彼は、自己の希望や偏見を捨てて、できる限り客観的に真理を探究することが学問であるなら、学問を志すものはどんな場合にもそうした態度で生きて行かなければならない、ということ私に教えてくれた。

無意識に受けた影響

ムコパディヤヤ ランジャナ
Mukhopadhyaya, Ranjana

東京大学大学院 (宗教学宗教学)

東京大学東洋文化研究所外国人研究員

私は誰にも影響されていないという考えをもっていました。最近自分が無意識に様々な人の影響を受けていることに気づきました。これがその一つの例です。

昨年の秋から今年の春まで、非常勤教師としてある大学で教えていました。私の授業の生徒には日本人とともに様々な国から日本に留学にきている学生も多かったのです。日本に来る前、私は一度だけ外国の先生に教えてもらったことがありました。それは、私が中学生だった時、私の英語の先生がイギリス人だったのです。その先生について印象に残っていることは、同じことを何度も繰り返して教えていたということです。その時は、なぜ先生はこのように教えているのか、私が全然英語を分かっていないと考えているのか、と思っていました。

さて、非常勤教師としての仕事は今年の春に終わったのですが、その最後の授業で学生に、私の教え

方についてどう考えているのかを一枚の紙に書いてもらいました。後でその感想文を読んだところ、3～4人の学生は、私が同じことをよく繰り返し教えていたと指摘していました。先輩の教授達に勧められたこともあったのですが、私は、意図的にそのような方法で教えていました。日本人の学生をはじめ、様々の国の学生が、私が教えていることを理解するための手段として、分かりやすく、何でも繰り返しながら教えていたわけです。それを学生に指摘された際、何年ぶりかで中学生時代のイギリス人の先生を思い出しました。

教え子から学ぶ

パク ヨンジュン
朴 栄 濬

東京大学 博士（国際関係論）
国防大学校安全保障大学院助教授（在ソウル）

今までの私に一番影響を与えたのは、私が修士課程を修了してから最初に教鞭をとって教えた学生たちである。私が大学院生から教育者に変身して学生と出会った最初の場合は、韓国の陸軍士官学校であった。民主化運動のピークを迎えていた1980年代の半ばに、私は軍服務の一環として、陸軍士官学校の教官として赴任したのである。民主化運動のターゲットがまさに陸士出身の軍人政治家だったから、私には陸士の生徒らが、まるで「独裁者の子」のように見えた。最初の授業に入って、彼らと出会った瞬間の緊張感は今でも忘れられない。制服を着ている彼らの姿が、傲慢な「軍人政治家」たちと重なって見えたのである。

しかしその緊張感は、生徒たちが持っていた素朴な純粋性や、青年らしい夢や真面目さを発見していくうちに、徐々に解かれた。彼らは、高校を卒業したばかりの、純粋な学生であって、「軍人政治家」

らの老獪なイメージとは遠い存在であった。彼らは、外部からの脅威から国家を守る真の軍人になりたいという夢を抱いて、士官学校という制限された空間で、滅私奉公の姿勢を失わずに自分なりの夢を育てていた普通の若者であった。さらに彼らは、年齢差も少なかった私に対して、先生に対する礼をきちんと守ってくれる一方、若者同士としての悩みや夢を相談しに来た。

根拠のない誤解から心を閉じていた私は、段々彼らに心を開き始めた。彼らはもはや「独裁者の子」ではなく、愛さざるを得ない教え子になった。私は彼らに、私が担当した専門分野の知識のみならず、「市民社会」の自由な価値や多様な思想を伝えようとした。若い先生に彼らは強い期待を寄せてくれた。その期待に何とか応えなければならなかったので、より研究や教育に専念しなければならなかった。彼らを教えながら、むしろ私の学問や研究に対する姿勢が真剣になったのである。教えられたのは彼らではなく、むしろ私であったかもしれない。良い学生のお陰で、一人前の研究者が生まれていた時期であった。彼らが卒業してから、そして私が陸軍士官学校を離れてから、長い時間が過ぎた。が、今でも私は度々自問自答してみる。彼らがあのとき私にかけていた期待に応えられるぐらい、私は研究者として最善を尽くしているのかと。彼らの胸の中に良い先生として長く残りたい。博士号を取得したこれから、新しく接する学生からも良い研究者として記憶されたい。そうした意味で、生涯において初めて出会った学生たち、そして今後新しい環境で会う、生き生きとした21世紀の学生たちが、私にとっては誰よりも影響を与えてくれる貴重な存在である。

娘は0歳、私は1歳

そん けんぐん
孫 建軍

国際基督教大学 博士（日本語学）
国際基督教大学アジア文化研究所客員研究員
国際日本文化研究センター研究員（在京都）

「卒業、就職、結婚、出産」。人は一生の中で、大きな節目を迎えなければなりません。しかし迎える時期や順番は、人によってそれぞれ違うものです。

7年前、「卒業、就職、結婚」を人並みに迎えた私は日本での留学生活を始め、もう一度「卒業」を迎えることになりました。7年間は長い歳月と言わざるをえません。研究の内容が膨らみ、いよいよまとめなければならぬ段階となっても、身が入りませんでした。そんな時、妻の妊娠が分かったのです。

赤ちゃんに大きなプレゼントを贈りたい。生まれる前に博士論文を完成しなければなりません。私はそう決意しました。「まるで生まれ変わったようだね」と人に言われました。そうです。私は生まれ変わったのです。今までにない責任感が生まれました。私は0歳から再スタートした気持になったのです。

だんだん大きくなっていく赤ちゃん。少しずつ形が整う論文。なかなか進まず、いらいらする時もありました。妻と病院に行き、赤ちゃんが手を振っているのを超音波で見て、「お父さん、頑張れ！」の声が脳中に響きました。それまでの苛立ちが吹っ飛び、忽ち消えていきました。夜更かしを重ねた日々、何度その手を思い浮かべたことでしょうか。赤ちゃんのささやかな動きが、自分にとって大きな力となったのを強く感じました。赤ちゃんのキックが力強くなるにつれ、論文も完成間近になり、今年の1月ようやく出来上がり、無事合格しました。そして2月27日に、娘が誕生しました。

3月20日は学位授与式でした。梅の花が満開の中、妻に抱かれながら、1ヶ月もたたない娘がお祝いに来てくれました。娘がチラッと目を開け、私に

視線を送った瞬間は、この上もない至福のときでした。その感動は一生忘れられません。娘に支えられ、励まされながらの10ヶ月でした。娘からいろいろ教わりました。責任、忍耐、寛容、命の尊さ、無邪気…娘がいなければ、論文の完成もあり得ませんでした。娘からかけがえのないプレゼントを贈られたと思います。

「卒業、就職」を2度経験している私です。5月から国際日本文化研究センターに就職することになりました。娘がもたらしてくれた機会だと思います。あらためて娘に感謝しています。

娘は0歳です。娘より1年前に生まれ変わった自分は1歳です。人生の先輩だけど、教えられる立場でもあります。これから共に成長していく私たちです。娘の影響を受けながら成長していくと思います。

人生の恩師

おう けい
王 溪

東京大学 博士（電子情報工学）
東京大学電子情報工学科研究員

今まで私に一番影響を与えた人は、博士課程の指導教授である青山先生です。先生との出会いがきっかけで、私の人生や人生に対する考え方が変わりました。

出会いは東京大学大学院入試の面接室でした。先生は面接官で、私は受験生でした。卒業研究に精一杯で、まともに受験勉強できなかった私の筆記試験の成績は悲惨なものでした。「本当にひどい成績ですな〜」と青山先生が面接中に半ば冗談でおっしゃったことを今でもはっきり覚えています。それでも先生は私の卒業研究と大学院で研究したいテーマについて熱心に耳を傾けてくださいました。先生の真摯なまなざしを見て、少し自信を取り戻して、自分の研究計画を語る事ができました。1ヵ月後、東大

から合格通知がきました。指導教官の欄に青山先生の名前が書かれていました。先生は筆記試験の落第生をご自身の研究室に受け入れてくださったのです。人間を学業成績だけで判断してはいけない、これが先生から学んだ最初の人生教訓でした。一方、一流の大学院で研究するチャンスが与えられ、私の人生はここから大きく一歩前進しました。

研究室に入って初めて青山先生の偉さを知りました。NTTの二つの研究所で所長を歴任した後、通信分野の権威として東京大学の教授になられたそうです。大昔から通信の研究に携わってこられただけに、その歴史と変遷に実に詳しく、話がわかりやすく面白く、さすが権威だと感心しました。しかし、先生は日ごろまったく偉く振舞うことはありませんでした。いつも学生とまったく対等、いや、むしろ学生よりも謙虚な姿勢で話をしていました。学生時代や研究所時代の失敗談を何も隠さず話してくださって、本当に偉い人は偉く見せないのだと、先生の姿を見て感心しました。先生と接しているうちに、すばらしい研究者はものすごく努力して研究業績を出すのはもちろん、その前にまずすばらしい人間になるよう、自分を磨くことが大事だと悟りました。

また、先生から研究というものの苦しみと楽しさを教えていただきました。研究室に入ってから新しい分野の研究を始めようとした私は、なかなか具体的な研究テーマが決まらず、五里霧中のままであったという間に1年が過ぎてしまいました。周りの人の研究がどんどん進んでいくのをみて、自分は不安と焦りが募る一方でした。そんなときに先生は優しい言葉で励ましてくださいました。「研究というものはテーマ探しが一番大変なのだ、夢のあるテーマを探さず場合はなおさらである。テーマが見つければ研究の70%は完成したと思えばよい。その後心身とも自分のテーマに没頭できるから楽しくなるよ。君はしっかりやっている、きっとそのうちにいいアイデアが浮かんで、すばらしい研究ができるから、それまでは根気よく幅広くいろんなことを勉強してどんどん実力を身につければよい。焦る必要はない、その調子でがんばれ！」先生の激励は何よりも心強いものでした。もちろん、すべて先生のおっしゃる

とおりでした。やがて私はやりたいテーマが見つかり、順調に、そして楽しく研究を進めることができるようになりました。

一方、研究のための研究ではなく、社会に役立つ研究、産業界で実用化される研究を目指すべきだと先生はいつも強調されています。また、日本が世界の通信先進国になるため、産官学共同で国家プロジェクトを推進する必要があると訴え続けられました。そのため、先生は毎日のように政府と民間企業を回って、共同研究プロジェクトの発足に尽力されました。先生の活動が国とたくさんの企業を動かし、新しいネットワークインフラ技術の開発を目標とする産官学共同研究プロジェクトが開始されました。私もこのプロジェクトに参加することができ、自分の研究成果をネットワークテストベッドに実装する貴重な機会をいただきました。同時に、先生のように、アカデミックの世界に閉じこもらずに、必ず社会に出て世の中の流れや時代のニーズをつかむ能力を身に付けたいとひそかに誓いました。

研究の指導以上に、青山先生は私にいろんなことを教えてくださいました。人生の恩師に心より感謝しています。

落花生

う ぎょうひ
子 曉飛

千葉大学 博士（社会文化科学）
日本大学法学部専任講師

2001年3月末、私は大学の国際交流会館に住居をえて生活し始めました。毎日、会館の正門を出ると目の前一面に広い畑があらわれます。いつも晴ればれとした気持ちになって、朝の美味しい空気を吸いながら駅へ向かいます。この畑は駅から僅か5、6分の場所にあり、毎日私の通り道です。周りは高いビルやマンションに囲まれています。本当に砂漠

の中のオアシスなのです。持ち主は、バブル時代も今も畑のまま大事にしており、その気持ちに感謝と共に尊敬の念を抱きます。いったいこの畑に何を作るのだらうと見ていると、小鳥がよく飛んできて、何かを探して食べている。注意深く見ていて、びっくりしました。「落花生だ！」千葉は落花生の産地だと聞いていましたが、直接落花生の畑を見るのは初めてでした。

私は落花生が大好きです。私の故郷では落花生は採れません。ですから、子供の頃落花生はなかなか手に入らないものでした。河北省に居る親戚から毎年少し送ってもらい、母はとても大切に保管し、たまに実を油で炒め、塩を少々ふりかけて、ほとんど父のお酒のつまみにしていました。ある年、家を引越するため倉庫に入れていた荷物の中から、お正月前に母が落花生を取り出してみると、大事にしていた落花生はすっかり鼠に食べられ、箱の中には殻しか残されていませんでした。お正月の卓に落花生がないことに、母の心はずっと痛んでいたようでした。

春の風が吹いて、会館の周りの木々は全部緑になりました。ある日、畑に年配のご夫婦の姿が現れました。見た感じ70才前後で、機械を押しているお爺さんは痩せ型ですら一と背が高く、比較的小柄なお婆さんはうしろで背を丸めて種を蒔いている様子です。かなり広い面積なのに、作る人はただの二人の老人です。大変ですね！二人で2、3日かけて、落花生を植え、その後しばらく見えませんでした。

毎日通る道なので必ず畑を見ます。その地に蒔かれた種は大丈夫かなと思いながら。

一ヶ月後、夜、雨が降った翌朝、遠くから眺めると畑の上にぼんやりと緑の色がかかっています。あ！芽が出てきた！私は何よりも楽しくて、急いで畑に近づいて見ると、落花生の実のように丸い緑の中に、少し黄色がかった芽がちょろちょろと出ています。何故かわからないが、私の心は弾み、うきうきした気分、元気一杯、駆へ向かいました。

その後、ときどき老夫婦が雑草取りや肥料を撒く姿を何回か目にしました。落花生はどんどん成長して、高いビルの谷間に、広く厚く柔らかい、青々と

した緑の絨毯を敷いたようになりました。暫く経つと、緑を押し分けるように黄色い花が咲き始めました。毎日、落花生に挨拶しながら出かけるのが楽しみになりました。

しかし、その年は何故だか雨が少なくて、夏に入ってから二ヶ月程雨が降りませんでした。最初、何株か落花生の葉の色が黄色に変わって枯れていき、そのあと枯れる数が増えました。ある日、機械で土をすき起こしている老夫婦が一休みしている姿を見つけて、初めて声をかけました。

「落花生は大丈夫でしょうか」

「そうですね、可愛そうですけど、でも大丈夫でしょう。そのうちに雨が降ってくるわ」お婆さんは優しい声で話してくれました。

「お爺さん、ここに落花生を作るのはもう長いのですか」

「うん、50年になった。昔この辺は、畑ばかり。いろんな物を作っていた。緑ばかりでしたよ」お爺さんの、風に吹かれ、太陽に焼けた赤黒い顔に、なにか寂しげな表情が現れました。

私は一株の落花生の葉に触りながら、「地下にもう実がなっているでしょう？」

「もう少しです。花がまだ咲いているでしょう。落花生の花は、咲いてすぐ地にもぐる。それから実になる。恥しがるお嬢様のようにね。実になるところを決して人間に見せませんよ。黙って静かに実になるよ」

お婆さんは笑いながら立ち上がり、「さあ、そろそろ仕事でしょう」。機械の音が再び響きはじめました。

私は目をまん丸くしました。自称落花生が好きな私なのに、落花生に関する知識は全くありません。

“花は咲いてすぐ地に潜り実となる” “なるほど、だから落花生だ” 私はもう一度落花生の株に目をやりました。小さめの葉間に、柔らかく静かな黄色い花が、雨が降らなくても頑張っている。しばんだ花の柄は一生懸命からだをくねらせながら土に近づこうとしている。土の中でどのように、どのぐらゐの実がなっているのでしょうか。

数日後、ようやく雨が降りました。私も相変わら

ず、毎日落花生に挨拶しながら、負けないように、早く博士論文を完成しようと日々を過ごしていました。

秋がきました。緑の畑はだんだん色が変わって茶色になりました。そしてある日の帰り、落花生は全部引き上げられて、小山のように何列にも並べられていました。もう収穫だ！私は名残惜しい気持ちで一杯でした。どんな収穫だったのでしょうか。この乾燥した年で豊作だったのでしょうか。残念ながら、その後あの老夫婦に会うことは出来ませんでした。

一年は早いですね。あっという間に晩秋に入り、国際会館の庭園の柿の実が、青から薄黄色を経て、もう赤っぽくなりました。自信満々で自分の姿を人の目に鮮やかに映しています。「あ、なんと美しいんだろう！」

しかし、畑の方は初めて私が会った時と同じようにまた元に戻って、何もなかったように静かになりました。柿の華やかさとくらべて、私の心中に少しばかり寂寥の感じが残っています。でも来年また緑が帰ってくる！また花が咲く！この砂漠の中のオアシスはずっと残っていてほしい。

私は国際会館での一年間の生活を終え、博士論文を完成し博士号を手にししました。

しかし、千葉を離れても、買い物に行くと、必ず落花生を買ってきます。スーパーの売り場に並んでいる落花生を見ると、太陽の下で皆のために美味しい落花生を作っている老夫婦の姿、そして花が咲くと恥ずかしそうに土にもぐり、人に姿を見せない落花生の控えめな性格をいつも深い感慨と共に思い出します。